



共済会
ミューチュアルパートナー

No. 21

昭和48年1月13日

第三種郵便物認可

HSK通巻第294号

1996年9月10日発行

毎月10日発行(一部100円)

(会費・協力会費に含まれています)

編集 財団法人北海道難病連

十勝支部

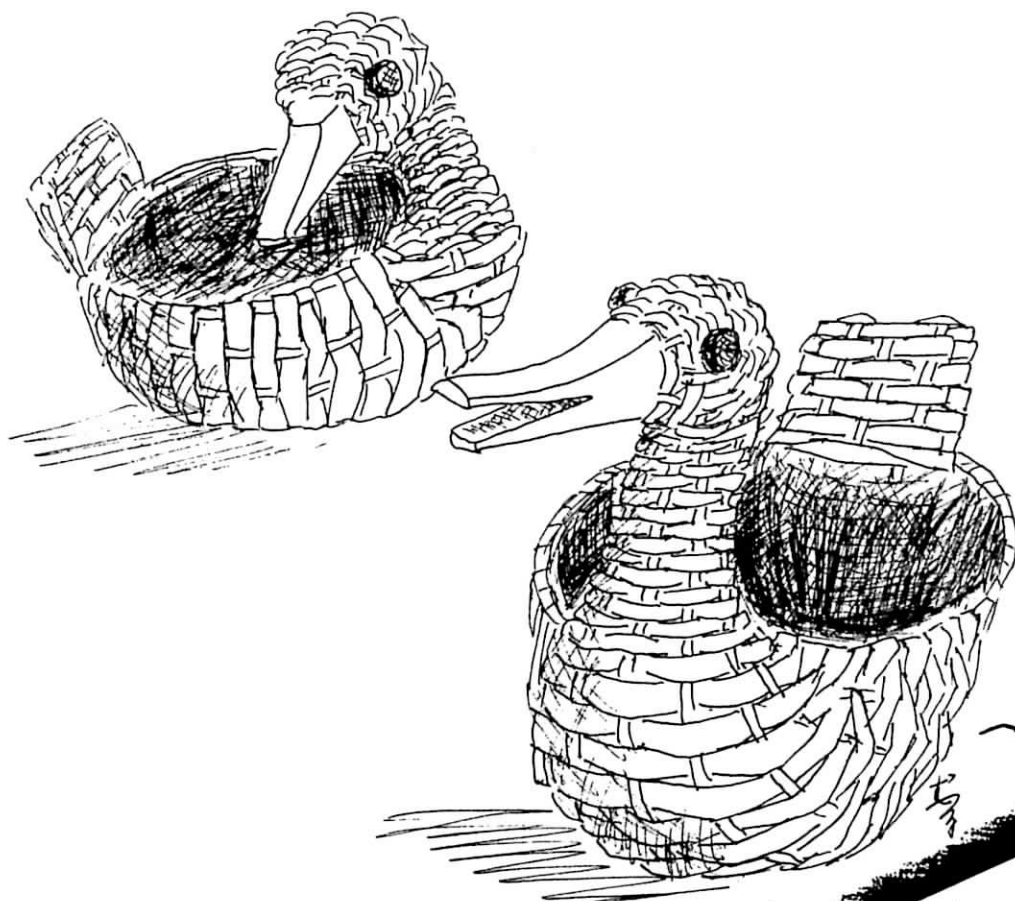
発行 北海道身体障害者団体

定期刊行物協会(HSK)

HSK

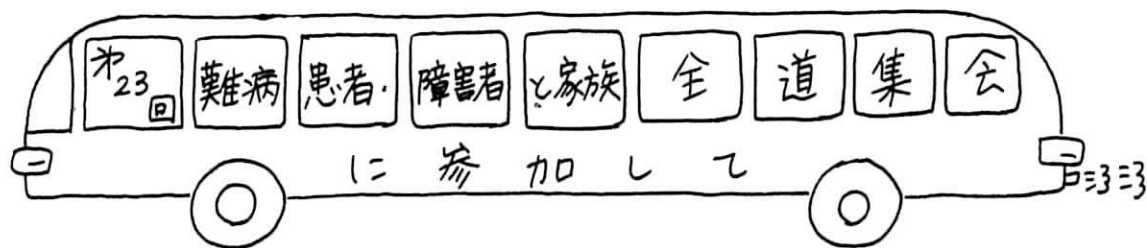
なんれん

とがち



…もくじ…

- 全道集會に参加して..P2~6
- お疲れさま~地域部會情報.... P7
- パネルディスカッション..... P8~12
- 紹介します(帯広友の會)..... P13
- 福祉機器情報「ふれあい帯広」..... P14
- 事務局からのお知らせ..... P15



8月3日(土)、帯広市総合福祉センター前より、こまどり号にて一路北見へ出発しました。

バスの中では、山根さんのご主人のほからいにより、なぞ"なぞ"、町村名の読み方などゲームを楽しみながら、あ、という間に北見市内のホテルに到着しました。

歓迎レセプションでは、ボランティアの方々の暖かい笑顔で地ビールのお酌をしていただき、本当においしく飲ませていただきました。

8月4日(日)、膠原病部会は「ステロイド治療と副作用について」をテーマに北見市赤十字病院オ4内科部長・酒井勲先生による医療講演会がありました。

改めて、治療の重大さ、副作用の怖さを知り、充分に理解しなくてはならないものと納得せざるを得ない限りであります。

オ23回難病患者・障害者と家族の全道集会、並びに北見市開基百年記念と記念すべき全道集会に参加できたことを有難く思います。

————— 膠原病 平井 園子 —————

8月3日は、朝のうち小雨模様でしたが、出席予定者全員が福祉センターから福祉バスで出発しました。

途中、2~3回休憩をとりながら、全員体調も良く、午後3時にはそれぞれのホテルに入りました。

6時からの歓迎レセプションには、皆で参加しました。

8月4日は、午前中は各分科会が分散会場で持たれましたが午後からは、市民会館で全体集会が開かれました。

- アトラクションに続いて黙とうが行われ、その時やはり毎年のように沢山の方が七くたなられているんだなあと考えさせられました。

多くの方のそれぞれの立場での挨拶がありました。このような大会にあるように「代理が比較的少なかったのに、ほっとしました。

続いて、体験発表が二人の方からありました。

- 藤井さんの「体内に巣くう暴れん坊とたたかい続けて20年」という話には、何とも表現しようのない感動をおぼえました。題名は、「たたかい続けて、ですが、骨化症という病気を自分の身体と心で受けとめて、たたかたり、受け入れたりしていく過程があまりにも厳しいものがあった様子が伝わってきました。会場一同、静まりかえって聴き入りました。

続いて、「子供に育てられて」という題で渡辺さんが話されました。二分脊椎症のお子さんを育てられた26年、がんばってこられた様子は涙を誘うものがありました。

“私は、がんばって子供を育ててきた”という話が多い世の中で、“子供に育てられた”と言えるまでには、他人にはわからない苦労があったものと思います。

その後、基調報告、記念講演と続き、集会アピールを採択して、2日間の日程を予定どおり終わりました。

帰路は、バスの中でゲームなどを楽しみながら、元気に帯広にもどりました。

皆さん、ご苦労様でした。

————— 小嶋会 山崎 富士夫 ———

1996年8月3(土)、8月4日(日)、才23回難病患者・障害者と家族の全道集会在北見市で、青い空・白い海・緑の大地・明日にむかってオホーツク!と題して行なわれ、十勝支部からは15名の参加でした。

8月3日、十勝支部は帯広市こまどり号(リフト付)で12名で11時に出発。バスの運転手は、河野様です。

山崎さんが挨拶。山根静子さんが、ゆでタマゴを1人1つずつ、温までつけて袋に入れて持ってきて下さり(病院の袋がさすがにユニーク)ごちそうさまでした。

山根隆さんによるゲーム。景品は、¥10,000,000以下との事に皆で爆笑。やさしいようで、難しいクイズを皆さん一生懸命考え?予定通りに昼食、ドライブインで一息。風景を見ながら16時に北見へ到着し、自分達のホテルへ。

歓迎レセプションが18時より、北見総合卸センターであり、北見患者会、ボランティアの皆様、ありがとうございますお世話になりました。女性合唱団、モダンダンスなど見せていただき、地ビールおいしか、たです。

8月4日、9時から分科会。あすなろ会は、市総合福祉会館にて参加者15名で、交流会が行なわれました。国分会長の挨拶の後、自己紹介があり、「私は、難病連に入会して今までで同じ患者さんと会ったのは始めてで、うれしいようには複雑な気持ちです。」と挨拶しました。

12時30分～15時30分まで、全体集会在北見市民会館大ホールで行なわれ、アトラクション・黙禱・閉会の挨拶、主催者挨拶、歓迎の挨拶と続き、患者・家族の訴え（体験発表）は、北海道後縦帯骨化症友の会の藤井英俊様が「死ぬ迄、骨化症（しびれ・痛み・歩行障害）と仲良く付き合う以外に方法はない。厚生省の研究班の研究を永続きして下さい。」と涙ながらに訴え...会場もシーンと静まった。

●次に、全国二分脊椎症児(者)を守る会の渡辺祐子様が、病院をいろいろと通院し、「苦勞され...一生障害者を持って生きて行く人に必要な、福祉サービス、精神面の援助が欲しいのです。何よりも息子は、私の宝なのです。」と訴えました。

記念講演は、青田昌秋先生が「流水の役割」と題し、流水についてスライドを見ながら説明し、「流水は地球の気候形成に深く関係すると同時に、私たちの人類食料資源を豊富に

してくれている”と、おもしろく説明していただきました。

基調報告は、伊藤事務局長より、“私たち難病患者はど
にいわばいいのか、社会に何が起きるのか、しなければな
らないこと、社会を作るために自身のために全ての難病患
者・障害者が手と手をつなぎ呼びかけるのです、家族と共
に……”その他いろいろと。

集会アセールは、医者・福祉・行政・関係各機関の皆さ
んに、ご理解とご支援を言えます。

閉会は、小田隆様が挨拶されました。

北見の皆様、ご苦勞様でした。

ボランティア、札幌難病連の皆様お世話になりました。

16時、北見を後にして、ごまどり号で帯広へ向かって出
発です。山根隆さん、病われているのにゲームをして下
さり、言葉つづり（一言を言って、文を作る）など、しな
がらバスの中で軽食をとりました。

十勝支部も、市のバスを利用し楽しく参加でき、とても
良かったです。

バス運転手の河野様、ありがとうございました。

あすなろ会 成田 愛子



お疲れさま〜! 地域部会情報

パーキンソン部会

日帰りバスツアー楽しく終る — 山根 静子 —

日帰り温泉行が7月24日(水)、21名の参加者を得て行われました。

十勝川温泉グランドホテル雨宮館の送迎バスにて、西10条北1丁目を基点に9時50分発車。西16南1、西22南3等を得て駅前、市立病院、ホテル着と参加者の都合の良い様に停止場を決めました。帰りは、その逆です。さすがパーキンソン、皆さん時間より前に指定場所で待っていました。当日、バスに乗らずに自家用車で参加した方もおります。

予定よりも早く雨宮に到着。会食には、1時間以上時間があり男性陣は入浴へ。女性陣は早速おしゃべりで、入浴は会食後にしました。入浴の際は、患者を健常者の家族が介助する形で行いました。男湯の方では、患者が洗ってもらった後、反対に家族に対し、背中を流してあげるという嬉しい一幕もあったそうです。

会食も食べきれない位のおぜん料理で、もったいない程でした。余興のカラオケも例によって歌手が多く、皆さん上手です。今まで歌った事がなかった人までマイクをにぎり、楽しい一時でした。

「又、来年も来たいね」という言葉をかわしながら、14時30分楽しかった一時を思い返しつつ、帰りの車中に身をゆたねました。

〔パネルディスカッション〕

— これからの地域保健 in とかち —

1996年 2月 10日

司会 (江口難病連十勝支部長)

それぞれの立場で、基本事項についての報告があったわけですが、ここでは、それについての補足意見ということで発表していただきたいと思います。先程の順番どおり北斗病院の鎌田先生にお願いします。

鎌田 (帯広北斗病院長)

はい、わかりました。追加させて頂くことが2点ございまして、ひとつは、病院の将来像ということについて、私達が考えていることについて補足させて頂きたいと思います。

私達の病院は、去年の12月から療養型病床群、法的な範疇では療養型に入りますけれども、私達のとらえかたとしては統合化された医療というものを一定のコンセプトの中に置いておきまして、その中の一施設として位置づけております。

統合化された医療というものはどういうものかと言いますと、私達の理解としましては、急性期から亜急性期の治療、そして慢性期、そして、在宅。いわゆる、脳外科・循環器科の患者さんに関して領域を設定いたしまして、一定の流れをつくりあげていくことがございます。

療養型病床群の中には施設としましては2点目のことと関連してまいりますけれども、THP、デイケア、在宅介護支援、ボランティア、訪問看護、というふうに、患者さんが病院から退院した後、在宅に向けて安心して在宅療養ができるようなソフトオブですね、実態的にもつくり上げていくというようなことを療養型病床群の中に相当なスペースをつくってスタートさせております。

そして2点目の事なんですけれども、この地域保健という事に直接的にかかわって参りますけれども、先程はちょっと申しませんでしたけれども、今年の4月、実質的には5月からスタートになると思いますが、THP＝トータルヘルスプロモーションといたしまして、労働省の勧めで健康増進事業なんですけれども、このものと脳ドック、身体ドックを組み合わせた恰好で内容を私達なりに公布化させていきたい。そういった中で先程からそれぞれのパネラーの方がおっしゃっておられたように、市町村の方々との具体的な連携の作業をもっと内容のあるものとして展開して行きたいと思っております

司会 はい、有り難う ございます。次に帯広市の野尻先生をお願いします。

野尻 (帯広市福祉部いきがい福祉課長)

先程、要介護老人の部分だけを述べておりましたが、実は2万人いらっしゃる65才以上の中、例えば老人クラブですと60才以上も入るんですが、今、1万2千人近くの方が活動なさっています。ただ要介護老人だけじゃなくて、私共の立場としては、これら元気なお年寄りの方の生き生きとして活動する場の整備が一つ必要だろうと考えています。それから、もう一つは独り暮らしの方が先程言いました様に百人ずつ増えて参ります。やはり、生活するのが心配だと、特に、夜に病気になったらどうしようかというような悩みがあるようでございますので、ただ単に在宅サービスだけではなくて将来はケアハウスでありますとか、或いは世話人付きの住宅であります建設省が進めておりますシルバーハウジングの建設など、住宅施策にも、私共、福祉の立場で取り組んで行かなきゃならないだろうと思っております。

司会 はい、有り難うございました。それでは芽室町の鳥本先生をお願いします。

鳥本 (芽室町保健課保健推進係長)

在宅介護支援センターの開設なんですけれども来年の予算の中で準備して行こうというふうに考え

ております。平成9年度開設を目指して町として在宅介護センターを開設したい。それは出来れば保健福祉センターの中に置いて、そこが文字どおり連絡調整だけでなく、実質的なものを伴ったかたちで、高齢者保健係とか保健推進係との一体化の中で行けるような望ましい支援センターを作るにどうしたらいいかということ、来年度一年かけて考えて行って9年度あたりに開設したいということで現在準備をしているところです。

司会 はい、有り難うございました。それでは伊藤さんの方からお願いします。

伊藤 (北海道難病連事務局長)

特にないんですけども、例えば、今日、こういう場で難病連の支部役員研修会としては、かつてないかたちでの取り組みで、お忙しい中、保健所長先生、特に北斗病院の院長先生という、今は北海道で最も忙しいお医者さんのひとりではないかと思うんですが、そういう人がわざわざお出でいただいたり、帯広市からも、役場の保健婦さんもお出でいただいたり、そういうつながりというものをどう利用するかということ、色々な話を聞くと同時にそういう部分を頭の中に入れておかなきゃならないと思います。

特に、今日は、道東各支部の集まりですから、このスタイルが、例えば、他の支部でどんな風の実現化させていくことが出来るんだろうか。難病連の支部活動だけじゃなくて、地域の住民の方々や地域の保健婦さん達と一緒にあってそういうことに取り組むということだって出来るんじゃないかと思えます。そういうことを通して私達が地域に返していくものは何なのかということを考えて行く必要があるんじゃないかということを考えて頂けたら有り難たいというか、非常に良い機会だったんじゃないかと思えます。

司会 はい、どうも有り難うございます。時間があるので、ここで質問とかありましたら出して頂きたいと思えますが、フロアー討論という形でも結構です。何かありましたらどうぞ、どうですか。・それでは、鎌田先生お願いします。

鎌田

もう、一点だけこういう機会ですでお話させていただきたいと思うんですが。

現在、痴呆症の患者さんのことについて、社会問題化しているわけです。そして高齢化社会に入りますます痴呆症の患者さんの数が増えていくということなんですけれども、残念ながら、この痴呆症に対する取り組みというのが、「ケア」というところに重点が置かれて、肝心かなめの「予防」だとか「治療」というところには非常に脆弱だ、希薄だと、現場に居る人間として思っております。

これは1点目はなぜこういう事が起こるかと言いますと、痴呆症そのものに対する理解が治らない病気、防ぎようのない病気というように理解されているのが一般的だからなんです。私達は現場にいて、先程の芽室町の方も含めましてお話にもありましたけれど、完成された痴呆症に対してどうするかという話、これは実際に非常に大切な問題なのです。

それと同時にもうひとつ大切なのは、痴呆症というのは、ひとつの症候群でありまして、種々の原因疾患を背景にしてでてくる症候群であるということなんです。その代表的なのは脳卒中なわけなんです。そして、もう1点は最近注目されている「廃用性痴呆症」という考え方なのです。ここ1年くらいのあいだに普遍化しておりますけれども、これは、そもそも基礎的な疾患が無いにも係わらず日常生活の中で、脳の活性化という側面から見て、非常に怠惰な生活を送ってしまうことを通して痴呆化がどんどん進んでいくと言う病態を言います。このことが最近明らかになってきている廃用性痴呆症です。

痴呆症と言うとどちらかという、精神科の先生達が扱うというのが一般的なんでございますけれ

ど、私達、現場においてフィールドワーク等をやっておりますと、感じますのはアルツハイマーという病気に代表されるような疾患で予防治療、予防及び治療というケース、現段階の医療では治療不可能と言われる疾患というのは非常に少ないわけなんです。圧倒的に多いのは、やはり廃用性症候群そして脳卒中というものを背景にして出て来る痴呆症というのが大多数であるということなんです。浜松医療センターの金子先生と含めて3人のパネラー・講演者でディスカッションしたんですけど、やはり、これから地域保健というものを考えて行くときに、この痴呆症に対してどう取り組んでいくのかということ、私達、医療機関として行政の方々を含めて、システムアップを是非つくり上げて行きたいと思っています。

現実的には北海道では栗沢町くらいですけれども、静岡県の方や長野県の方では具体的な作業が展開されて来ております。そういった活動というものを、この十勝のチームの中において広範な形で是非作り出していくことが大切なと言うことです。

司会 はい、どうも有り難うございます。

それでは、終わりにして行きたいと思いますが、実は、今、鎌田先生がお話された話に関連して最近「痴呆は予防できる」と言う講演を聞いたわけですが、それを聞いて思ったんですが、もし、前から寝たきり防止ということで、国の方で色々施策の展開を行っているわけですが、「痴呆も予防できる」「寝たきりも予防できる」ということになれば、将来的に介護の費用というのが国全体に見れば、今、考えている以上に安く上がるということになれば、今、介護保健とか色々大騒ぎしてますけれど、今からそういう予防対策をきちっとやっていけば、将来の我々の負担というのは思った以上に低く抑えることが出来るんじゃないかと、そのようなことを感じました。

今、鎌田先生から同じような話を伺って、大変勇気づけられたというふうに感じています。それでは貞本先生に最後の締め括りということでお話を伺って終わりにしたいと思います。よろしくお願ひします。

貞本 (帯広保健所長)

どうも皆さんご苦労さまでございます。お話を伺いまして2・3気がついた点をお話したいと思いますが、この会場を拝見しますと、車椅子で来られている方もいらっしゃるがどうでしょうか。この施設は利用し易いでしょうか。地域や住宅ケアと言いますと家庭と病院だけというような考え方もあるかも知れませんが、そんなことにはならないですね。年に何回かはこういう所で風呂に入りたいと考える、これは当然の欲求だと思います。三月に保健所の方で道のモデル事業で特定疾患の何人かの方々にこういうホテルを使って宿泊研修をやろうと計画を立てておりますけれど、じゃあ、この地域にそれが出来るホテルがあるかという、あまり無い。それが普通の世の中なのかと、口ではノーマライゼーションと言ってもですね、こういう施設自体がそうはなっていないわけですね。

こういう面では行政として、まだまだやらなきゃならないことが沢山あるというふうに思っています。これは、旅館組合の方々にも働き掛けをしまして、今、「ハートビル法」と言う法律も出来ています。公共施設については高齢者・障害者が使い易いような施設にしていくという法律もありますけれども、あまり拘束力が無いということではなかなか進んでおりません。こういう事業をきっかけに、そういうものを進めて行かなきゃならないんじゃないかと、是非、先程、事務局長さんの方から資格制度が導入されて、専門分化していくと、確かにわれわれ保健所の職員なんてのは殆ど何らかの資格のある人が多いです。それは、逆に言うところある意味で弊害が生じ、セクト化につながっていくと、それぞれの職種でセクトで固まってしまう傾向が無いわけでもありません。これを乗り越えていくには、本当に困っていらっしゃる患者さんの声・ニーズ・欲求に目を向けることだと思います。

是非、皆さんの声を聞かせて頂くということが必要だというふうに考えております。

それから福祉施策についてですが、これは全く、今日、初耳でございまして私が不勉強なこともあるかもしれませんが、大体こういうものは役所に情報が入りますと一番最後に来るのは私の所、何しろはんこは順番におして行きますから、大体、知るの一番最後と、全くこういうことがあるということは他にもいろいろ情報を集めればいろいろあるんでしょうけれど何しろ真面目にやっておりますので、ちょっと情報が入っておりませんでした。ただ、これを拜見させていただきますと、決して従来からの制度と矛盾するというふうには考えられません。今後共、保健所は地域の中の特定疾患対策のコーディネーターとしてやって行かなきゃならないと考えております。そういう意味で市町村の福祉対策と保健所は中心となる従来の保健対策とは、これは表裏一体だというふうに思いますのでそれがうまく噛み合っって初めてうまく行くんだらうと思います。それから、保健所も市町村も高齢者対策を抱えまして、痴呆対策も大変大きな課題になっておりますし、精神保健対策も進めなくてはならないのです。そうすると膨大な業務を抱えていることになります。

例えば退院した後の情報が欲しいと、そういう脳卒中等の単純法システムも何年か前から動かして参りますけれども、これを担当している職員が保健所の中でも1名と、これがまた、それだけをやっているわけじゃないんですね。他にも、結核、精神特定疾患から他の業務を沢山抱えながらやっていると言う中で、確かに人を増やせば出来るんでしょうけれども、それにも限度があるそうならば、こういう分野にも、今までボランティアというところかと言うと、手足を使って頂くような内容が多かった訳ですが、これからはボランティアもある面ではコーディネートしてもらおうとちょっと一歩踏み込んで行政の中で、ぜひ、今までの経験や技術を生かしてもらおうようなボランティアも必要になるんじゃないかと考えています。

どちらかと言うと、一般の方を遠ざけていたような所もありますけれども、これからそういう時代ではないのではないかと。一番責任を痛感しているのは北海道は官主導というかも知れませんが十分に主導して来なかったと思います。この地域で皆さんが一体何を、今、必要としているのか、どんな医療が必要なのか、実際は恥ずかしいことなのだけれども、皆さんが何処にどんな形で通院されているのか、そして、どういう形で医療を受けていらっしゃるのかということ、十分に把握していませんよ。残念ですけど、そういうことが分かれば、例えば、帯広市は市立病院を作ろうと言う話があります。その中で、もし、皆さんの声が大きければ、その中にそういう専門の医者を連れて来ると言うことも可能だと思いますし、そういうことが、個々の必要なお声を集約して、行政の中に反映させて行くとそういう流れを作らないことには、いつまでたってもどこかうまく繋がらないような形になっちゃうんじゃないかと、そういう気がしています。そういうものを少しでも解決、乗り越えて行くといえますか、私自身の行政の考え方は、できるだけ地域のニーズを拾い上げてそれを政策の中に何しろ中間的な行政ですから、皆さん地元の人達の、実際には困っている人達の意見を出来るだけ多く客観的にすくいあげて、それを行政の中に、道や国の行政につなげていくと、そういう役割だというふうに私自身考えております。そのためにも、先程、一番最初に申し上げた個々のケアプランから地域プランへ、というような方向の取り組みというのは続けていかなきゃならないのではないかと思います。前回の紹介が少し足りなかったですけど、今、やっている保健所、私の所の事務局でやっているのは、更生化研究で一千万単位のお金を貰ってやっています。これは、厚生省自体かなりセクト的なんですね。私がお金を貰っているのは、健康政策局という所で保健所とかそういう行政機関を担当しています。しかし、健康政策局というのは一番目の局なんでしょうけれども、ある面ではこういう特定疾患対策をやっている局とはちがうのです。また、老人福祉局ともちがうので、連携がうま

くとれていないようなんです。今、やっている仕事というのは、まさに、特定疾患の患者さんがどう
いうニーズを抱えているのか、それを把握するための手法を高齢者で用いた手法を導入しまして、も
っと客観的に積み上げ出来るような形でやりたいということで、そのための研究をやらせてもらっ
ています。それを形のあるものにして、今後、この地域の姿につなげて行くような対策になればいいな
と思っています。そうしなきゃ、何しろ、大分たくさんのお金を使っているものですから、しなきゃ
ならないというふうに思っています。

特定疾患対策については、日々、充分に出来ていないという実感があるのですけれども、そういう
意味では、是非いろんなところに出させて頂いて皆さん方の生の声を聞かせて頂きたいと考えていま
す。その結果を今後の対策につなげて行きたいというふうに考えていますので、今後共よろしくお願
いします。

以上



1996年2月10日、「これからの地域保健 in とかち」
と題して行なわれた、パネルディスカッションの様子を
テープおこしの都合上、内容が前後してしましますが、
載せました。

ご紹介いたします(ボランティア編)

私達患者会の活動にとってボランティアさんのご協力はかかすことができない大切なものとなっています。お世話になっていますボランティアさんの中でも一番古いお付きの帯広友の会奉仕グループさんをご紹介いたします。

帯広友の会とは

全国友の会は1930(昭和5)年、羽仁とも子を中心に「家庭は簡素に社会は豊富に」の理想のもとに、雑誌「婦人之友」の愛読者によって創立された。中央部は東京にあり約3万人の会員がいる。

帯広友の会も同年12人で発足、現在は20代~70代まで250人の会員が友の家を拠点に活動している。— ≪十勝大百科より≫

患者会とのかかわりの中で

(帯広友の会奉仕グループ) 丹野 由美子

帯広友の会と難病連の交流は何年になるのでしょうか。私達は知識として病気のことは知っていても、健康な時は病んでいる人が肉体的、精神的にどんなにっらい思いをしているかはわからないものです。皆様と接して初めてこうなのかしら、あ、こういう大変な事もあるのだと気付かされることばかりです。声かけを下さった時にしか参加出来ないで心苦しく思っています。が、長いお付き合いをしたいと思います。

今年は花火販売で大変お世話になりました。公私共にお忙しいと察するのですが、かゆいところに手が届くというか、こちらのことが見えているかのように、さりげなく今年は花火販売どうなっていますか...と声をかけていただきました。困った時に、きがぬく、お願いできることはとても心強いことです。これからどうぞよろしくお願い致します。

〈荒尾記〉

ふれあい帯広 福祉機器情報

ご相談ください

- ★ 機器が必要になったとき、より快適な生活を送るための、適切な用品を、ご紹介すると共に、利用できる制度で、できるだけ自費負担を軽減できるよう、お手伝いさせていただきます。
- ★ ツールームまでおこしになれない時は、お電話下さい。すぐ、おうかがいいたします。



- ◎ ご訪問
- ◎ 申請手続きのお手伝い。
- ◎ 商品の配達などもいたします。

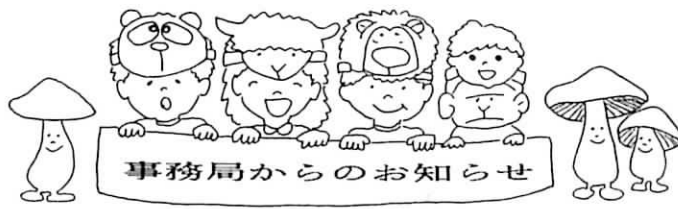
お願い

北海道難病連

「ふれあい帯広」での相談活動、機器販売は、重要な活動の一つです。会員の皆様からも、ご近所・お知り合の方々へ、どんどんお知らせ頂き、お役立て下さい。

問い合わせ先

患者自身による患者さんのための福祉機器・介護用品ショップ
（財）北海道難病連 福祉機器事業帯広営業所
ふれあい帯広 帯広市西5条南13丁目
電話 0155(23)6602
営業時間 月～金 10:00～18:00



事務局からのお知らせ

🌸 ご寄付・リサイクルバザー品をいただきました——

イトワザアルファ様	谷川千恵子様	高橋公美子様
伏見守利様	赤間ゆり子様	若田正一様
すしの久田様	大旗こずえ様	

🌸 オ23回全道集会(北見)協賛広告をいただきました——

北盛建設(株)様	(株)タム様	とかち印刷様
大和写真館様	熱原帯広様	笹谷建設(株)様
(株)ハヤシ様	十勝舗道(株)様	イトワザアルファ様
サイト-商事様	(株)土井組様	北日本ビル(株)様
高木皮膚科診療所様		DH1メディカルサービス様
アップルファーマシー様		十勝勤労者医療協会様
ICAN英会話様		(株)マノスランチョイルパン様
有田井畳内装店様		

—— ありがとうございます ——

JPC 国会請願
 全国一斉街頭行動!
 1996年10月5日(土)
 PM 1:00~3:00
 藤丸前

リサイクルバザー用品
 ご寄付ください。
 食器・手作品・贈答品
 古着・古本・何れ結構
 ですので、お願い
 致します。



はげましあい、たすけあう北海道難病連

ふれあい帯広

【北海道難病連十勝支部】

帯広市西5条南13丁目19-2
TEL (0155) 23-6602
FAX (0155) 23-7071

■オープン時間
AM10:00~PM6:00 (月~金)

※土・日・祝日はお休み。

患者自身による患者さんのための 福祉機器ショールームです。

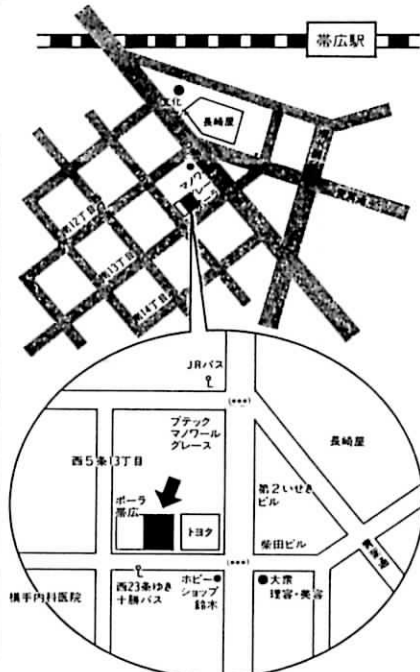
主な展示品

- 特殊ベット
- 電動ベット
- 床ずれ防止器
- 車椅子
- 歩行器
- リハビリ用品
- つえ各種
- ポータブルトイレ
- 入浴用品
- 視覚障害者用品
- その他各種

福祉制度の利用も可能です。

- 日常生活用具
- 補装具
- 厚生年金車椅子

ご病気のことや、福祉制度のご相談もお待ちしています。



- (個人参加難病患者の会) あすなろ会
乾 脚の会
再生不良性貧血症者と家族の会
全国筋無力症友の会北海道支部
全国膠原病友の会北海道支部
全国心臓病の子供を守る会北海道支部
全国二分骨椎症児(者)を守る会北海道支部
全国パーキンソン病友の会北海道支部
脳血管障害の子供を守る会北海道支部
日本オストミー協会札幌支部
日本てんかん協会(波の会)北海道支部
日本リウマチ友の会北海道支部
北海道潰瘍性大腸炎・クローン病友の会
北海道肝炎友の会
筋ジストロフィー部会
北海道後縦頸帯骨化症友の会
北海道小鳩会
北海道腎臓病患者連絡協議会
北海道腎臓小脳変性症友の会
北海道側頭症児を守る会
北海道多発性硬化症患者会
北海道低肺の会
北海道橋本病友の会
北海道パージャーマ病友の会
北海道ヘモフィリア(血友病)友の会
北海道ベテラック病友の会
未熟児網膜症から子供を守る会北海道支部
もやもや病の患者と家族の会北海道ブロック

あ と が き

今回の表紙の絵は、後縦頸帯骨化症の大道睦子さんに書いて頂きました。絵じのない私は、荒尾さんの様に牛の絵を書くこともできず、大道さんにお願いしました。大道さんは、個展を開くなど、大変元張っていらしゃいます。次号からの表紙もお願いしてますので、お楽しみに！(ま)

HSK なんれんとかちNo. 21

編集人/財団法人北海道難病連十勝支部 江口美生男
帯広市西5条南13丁目19-2 『ふれあい帯広』
☎0155-23-6602 FAX 23-7071
月~金曜10時~17時、土・日・祝日は休み

昭和48年1月13日第三種郵便物認可
1996年9月10日発行 HSK 通巻294号(毎月1回10日発行)
発行人 北海道身体障害者団体定期刊行物協会 細川久美子